

『2010年度新設科目「プロジェクト実践A・B・C・D」について』が 開催されました

実施報告

日時: 2009年11月10日(火)17:00～18:30

場所: 湘南キャンパス 8号館4階 8-408教室

司会: 岡田 工(チャレンジセンター准教授)

- 内容:**
1. プロジェクト実践に向けて
パンdeラポールの取り組み
 2. プロジェクト実践に向けて
サイエンスコミュニケーターの取り組み
 3. プロジェクト実践に向けて
TICCの取り組み
 4. 質疑



(尾崎由佳 チャレンジセンター講師)

(岡田 工 チャレンジセンター准教授)

(森山美紀子 外国語教育センター准教授)

1. プロジェクト実践に向けて:パンdeラポールの取り組み

尾崎由佳(チャレンジセンター講師)

2010年度新カリキュラムで新設される「プロジェクト実践A・B・C・D」の授業目的の一つは、プロジェクト活動に役立つ専門知識の学習である。この授業に近似した活動を今年度行っている障害者自立支援プロジェクトの取り組みについて紹介した。

障害者自立支援プロジェクトでは、2009年度より自主的勉強会「パンde Scholar」を開催している。「パンde Scholar」は、プロジェクト活動に必要な知識学習とスキル獲得を目的としており、学習テーマは①パン販売に活かすための統計分析法を学ぶこと、②障害者に対する偏見を減らすための心理学を学ぶこと、の2点である。発表者である尾崎は、プロジェクト・アドバイザーの立場でこの勉強会の指導を行ってきた。統計ソフトを用いた販売データの分析法や、偏見に関する心理学の学習を通じて、プロジェクト活動がより充実し、学生側にもメリットの大きい活動となったこと、そして外部関係者(秦野精華園)からも好評を得たことなどが報告された。



2. プロジェクト実践A, Bについて

岡田 工(チャレンジセンター准教授)

チャレンジセンタープロジェクト「サイエンスコミュニケーター」参加学生向けの「プロジェクト実践」科目について、今後の展望が述べられた。授業目的として①「サイエンスコミュニケーターとは何か」という認識を養いつつ、科学的知識を増やすこと、②伝えるためのコミュニケーション能力を高めること、③パソコンを使って教材を提示する能力を高めること、④サイエンス・自然科学を「わかりやすく」説明するスキルを身につけることを目指し、これらの要請に応えられるような授業構成を考案している。具体的には、「プロジェクト実践A」においてサイエンスコミュニケーターについて理解することと、活動の手伝いができるコンピュータスキルを身につけること、「プロジェクト実践B」では実験を通じてプレゼンテーションやコミュニケーションの楽しみを知り、魅力のある実験を探し出すことを目的とした授業を行う予定である。その一環として、簡単に試すことのできるパッケージ化された実験プレゼンテーション教材(大道仮説実験)を用いて話し方・見せ方などを練習したり、「東海大学のたのしい実験」(仮称)として、わかりやすい・楽しい実験プレゼンテーションを開発して、誰でもできるような実験マニュアルを作成していくという案が提示された。



3. プロジェクト実践に向けて:TICCの取り組み

森山美紀子(外国語教育センター准教授)

チャレンジセンタープロジェクト「Tokai International Communication Club (TICC)」は、身近な国際貢献・地域貢献活動を行うプロジェクトである。国際教室での学習支援活動や、日本の小中学校の状況を紹介する資料作成、外国人との各種の交流イベントなどを行っている。来年度の「プロジェクト実践A・B」は複数の教員がリレー形式でそれぞれの専門分野に関連する授業を行う。授業目標は、①外国人との交流活動のあり方や外国人がよりよい生活を送れるような支援を考え、新たな活動を企画すること、②一連の授業を通じ、社会参加意識を高めることに置く。また、授業という場でプロジェクト活動について振り返るといった作業も併せて行っていく。授業スケジュールとして、I. 問題把握、II. 問題分析、III. 意思決定、IV. 提案 の4つの学習段階を設け、I、IIの段階で学んだ知識・問題意識を最終的に新たな外国人支援企画の提起につなげることを目指す。



4. 質疑応答

- Q サイエンスコミュニケーターは、ロケットプロジェクトやライトパワープロジェクトなど工学系の他プロジェクトとタイアップすることは考えているか？
- A 今後のカギとなってくると思う。日食が終わった後にどのようにつなげていくかということが焦点となっている。学生たちが協働できるような仕組みを作ってあげたい。
- Q サイエンスコミュニケーターには文系の学生も参加しているのか？
- A 文系学生も参加している。理系文系問わず、科学の説明ができるようになるようにしたい。彼ら自身が学び、力をつけてもらうことが望ましい。
- Q パンdeラポールの活動に関連して現在行われている勉強会の内容は、かなり専門的で受講者が心理学系の学生に限られるのではないか感じられた。この内容をそのまま授業にした場合、新たにプロジェクトに入りたいと思って授業を履修する学生が特定分野の学問を学ぶ学生に限定されてしまい、プロジェクト活動に参加する学生にも偏りが生じる可能性があるのではないか。「プロジェクト実践」はプロジェクト全体にも影響する科目である。チャレンジセンターのプロジェクトは学科横断型で、所属学科が広い分野にわたる学生を受け入れることを趣旨としているが、この点についてはどのように対応するのか。
- A 現在でも心理学専攻以外の学生が多数参加しており、彼らにも十分に理解できる内容の授業になるよう心掛けている。ただし、今後さらに門戸を広げていくためには、来年度の授業内容について見直していく必要があると考えている。